

---

# CLANNAD ~ Ushio's story

上原知美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CLANNAD~Ushio~ Story

### 【Zコード】

Z0829K

### 【作者名】

上原知美

### 【あらすじ】

奇跡が起きた16年後。

朋也は、渚と汐がいる幸せな生活を送っていた。

この物語は、受け継がれてきた光の物語。

その物語の主人公は、岡崎汐。

この小説は汐の物語であり、オリキャラが多数登場します。予めご了承下さい。

なお、原作に忠実なストーリーです。ネタバレも含む可能性があります。

初投稿作品です。

よろしくお願ひします。

## 第0話 物語の始まり（前書き）

初めまして、上原知美です。

初投稿作品です。

文章が下手だつたら遠慮なく文句を書つてください。

よろしくお願ひします。

## 第0話 物語の始まり

あの奇跡からもう1~6年が経った。

汐は渚と同じ病気にかかることがなく、すぐにでつかくなつた。

もう汐は高校3年生だ。

しかし、渚と同じ病気にはからなかつたが、性格は似ていた。

天然で、時々意味不明な行動を起こす。

そして、人見知りする方で、友達もあまりいらないらしい。

そして、見た目も出会つた頃の渚にそっくりだ。

渚も、早苗さんそっくりだ。

恐るべし親子関係。

汐は、俺や渚が通つていた高校に入学した。

取り壊されるはずの旧校舎は取り壊されなかつた。

反対意見が多く、計画は中止された。

汐達の世代には嬉しい知らせではないが、渚と俺達の世代にとってはもちろん良い知らせだった。

汐はあの学校できっと、思い出を沢山作るだろ。俺と渚の思い出の場所だからな。

## 第0話 物語の始まり（後書き）

次回から本編に入ります。

## プロローグ 少女の願い事（前書き）

CLANNADと話の内容がとても似ています。  
あまり、オリジナリティがないです。

「プロローグ」となっていますが、一応本編と繋がります。

## プロローグ 少女の願い事

「この学校は好きですか？」

私はとっても大好きです。  
だけど、なにもかも、変わらなければいけないんです。  
うれしいこととか、楽しいこととか、  
ぜんぶ…変わってしまうんです。

それでもあなたは、この場所を好きでいらっしゃますか？」

桜の木に向かって、彼女は話した。

「私は、この学校が大好きです。  
だけど、学校ではひとりぼっちで、寂しい時もあります。  
友達も出来なくて、いつもひとりぼっちです。  
毎日が、少しだけ憂鬱に感じます。

学校は、本当はとっても楽しい場所なんです。  
でも、苦しいことがたくさんあって、辛いことが多いんです。  
それでもあなたは、この場所を好きでいらっしゃますか？」

彼女は手を前に出し、両手を合わせ、ぎゅっと握り締めた。

「お友達ができますよ！」。

高校生活最後の1年を迎えた、ある少女の願い事だった。



## プロローグ 少女の願い事（後書き）

最初の段落は、渚がCLANNAD第1話で言っていた言葉を少しだけ変えて書きました。

「私はこの学校が大好きです…」の段落は、私なりに渚の言葉を変えて書きました。

次話は第1話「桜舞い散る坂道で」です。

よろしくお願ひします。

上原知美

## 第1話 桜舞い散る坂道で（前書き）

CLANNAD第1話「桜舞い散る坂道で」から今回のサブタイトルを取りました。

みじくお願ひします。

## 第1話 桜舞い散る坂道で

「だったら、作ればいいじゃねえか。」

「え..?」

少女は振り向いた。

そこには、一人の少年が立っていた。

「友達作りは、願わなくとも自分でなんとかできるだろ。  
願うのは、ムチャクチャ頑張つても自分で何も出来ない時のために  
とつておくんだ。」

おまえはまだ頑張れる。」

少年はそう言い、哀しみに満ちた瞳で空を舞つ桜を見つめた。

「俺は、この町が嫌いだ。  
この町で俺は、夢や希望をすべて失った。  
この町で迷ったんだ。」

良いことなんて一度も起こつてない。  
ここは、絶望の場所なんだ。

俺は、この町が大嫌いだ。」

「だったら、この町を好きになるんです。

この町で夢と希望をすべて失ったのなら、この町で夢と希望を取り戻すんです。

この町で道に迷ってしまったのなら、この町で正しい道をもう一度見つけるんです。

良いことが一度も起きていないなら、これから自分で良いことを起こすんです。

ここが絶望の場所なら、これから自分が希望の場所に変えるんです。この町が大嫌いなら、この町を大好きになるんです。

ムチャクチャ頑張つても一人で何も出来ず、あきらめてしまいそうな時に願うんです

この桜舞い散る坂道で。」

桜の吹く道で少女は、少年にふわりと微笑んだ。

桜舞い散る坂道での、小さな小さな出会いだった。

第1話 桜舞い散る坂道で（後書き）

次話もよろしくお願ひします。

上原知美

## 第2話 叶えたい夢

始業式から2日が経つた。

昼休み。

騒がしい教室と廊下を抜け、少年は一人ふらふらと歩いていた。

少年は後者の端に来ていた。

そこには、初めて見た部屋があつた。

「…演劇部？演劇部なんてこの学校にあつたか？」

少年は部室の扉を開ける。

部室の後ろには大量の段ボール箱が積まれていた。

そして、真ん中には向かい合わせの机と椅子が2つ置かれていた。

部屋の前を向く椅子に座つていたのは、あの少女だった。

「何かご用ですか？」

少女は食べるのをやめて、箸を持ったまま少年に話しかけた。

「あ、いや、別に用は…。」

少年は言葉が見つからず、少し慌てた。

少女はふと思いついたように言った

「 もうこいえば、始業式の日になりましたよね？」

あの日のよひに、少女はふわっと微笑んだ。

「 一緒にいじ飯、食べませんか？」

その言葉に少年は少し困惑した。

「 もう、いじりがいくつも。」

もう一つの机に案内された。

「 あ、ああ…。」

「 ジリで再開したのも、きっと何かの縁です。」

じまじくの沈黙のあと、少女は箸を置いて話した

「 私、3年A組の岡崎汐とここます。よろしくお願ひします。」

汐はペコッと頭を下げた。

「 あ、俺はム瀬翼。3年B組。よろしく。」

「 お隣の教室なんですね。”翼”ってかっこいい名前ですね。」

「 もうか？俺はさぞ」でもあつそつと普通の名前だと慰めながら。

「 そんなことないですよ。一人一人の名前は、とっても大事なんで

す。由来は知つてゐるんですか？」

「うーん…。母さんが俺を産んだ時に、静かな世界にいて、一人ぼつちの少女を見たつて言つてたんだ。

その少女は翼を持つていて、抱えてた赤ん坊を翼に包み込んだんだ。そして、その赤ん坊は母さんに渡され、少女は消えた。翼に守られていたから、”翼”つて名前になつたそうだ。

母さんは死んだけどな。」

「そうなんですか…。」

「おまえこそ、”汐”つて名前、どつから来たんだ？」

「私の名前は、お母さんの名前から取つたそうです。お母さんの名前が”渚”なのでそれに関係してゐる”汐”つて名前をつけたんです。人生は波みたにいろいろなことが起つるけど、それを乗り越えますよ」つてそういう名前がついたんですね。」

「へえー。」

「…。」

「…。」

「…おまえ、いつもここで一人で食つてんのか？」

「はい、そうです。」

「なんでだ？」

「私、この部屋が好きなんです。お父さんとお母さんの思い出の場所なんです。」

「思い出？」

「昔、私のお父さんとお母さんもこの学校に通っていたんです。一人で演劇部を再建したんです。でも、卒業した後にまたなくなっちゃったんです。その後、一度も演劇部は活動を再開してないんです。だから、私が演劇部の活動を再開したいんです！」

「でも部員がなかなか集まらないんだろ？」

「うう、やうなんです……。」

汐はしょんぼりした顔で応えた。

「でも！広瀬君が来てくれたのでもう大丈夫です！」

「は？」

「お母さん、お父さんに出来つてからいろいろな良いことが起つたつて言つてしましました。だから、私も今日広瀬君に会つたから……」

文の途中で汐は固まり、顔がだんだん赤くなつていた。

「あ、う、うめんなわ……うつ意味じゃなくて……。」

「……」

「ほえ？」

「俺みたいなのがいれば演劇部が活動を再開するんだつたら、それ  
くらじ手伝つ。」

「本当ですか？」

汐の輝いている瞳を見て、翼は少しきっとした。

「あ、ああ…。どーセハイマだし…。

じゃあ、俺そろそろ行くな。放課後、またここ来るから。それじゃ  
あ。」

翼は逃げるようにして演劇部室を出て行つた。

後ろの扉をパタリと閉めると、突然、目の前が真っ白な光に包み込  
まれた。

眩しくて、目をつぶつた。

目を開ければ、果てしない緑の大地。

そして、一人の、翼を持った少女が立っていた。

その後姿は、あの人にそっくり。

ホタルのような光が、空を舞っていた。

気が付けば現実に引き戻されていた。

少年は不思議に思ったが、静かな廊下をそのまま歩き続けた…。

## 第2話 叶えたい夢（後書き）

評価・コメントよろしくお願いします。

上原知美

### 第3話 叶わなかつた夢（前書き）

後書きや、解説などは  
活動報告で書きます。

よろしくお願ひします。

### 第3話 叶わなかつた夢

放課後、翼は演劇部室で汐を待っていた。

ふと、あの一人ぼっちの少女の事を思い出し、常に鞄の中に入っているスケッチブックを取り出した。

（希望、か…）

鉛筆を取り、何かを書き始めた。

汐を待ち続けて15分以上が経つた。

翼は、出来上がった作品を見て、俯いた。

（全然ダメだ…）

「お待たせしました、広瀬君！」

汐が部室にやつてきた。

「遅くなつて」「めんなさい」。資料室でお母さんがやつていた劇のビデオを持ってきました。一緒に見ましょう。」

汐は、古いビデオテッキにビデオを挿入し、テレビの電源を入れた。

「どうしたんですか、広瀬君？」

俯いている翼が気になり、駆け寄ってきた。

「絵が上手なんですね。美術部に入ったときつとよじいですよ！」

「…広瀬君、左利きだつたんですね。私、左利きの人には会つのは広瀬君が初めてだと思います。」

「…俺は、本当は左利きじやなかつたんだ…。」

「え？」

（「Jの人なら、きっと…。）

何故かそんな事を、翼は思つていた。

「本当は、Jにいなかつたんだ、俺は。」

海外の学校で、芸術家になるつもりだつたんだ。

だけど…事故に遭つて、右手が思い通りに動かなくなつて…。」

ポタリと、一粒の涙が、翼を持つた少女に落ちる。

「絵が、描けなくなつたんだ…  
希望や夢も…すべて失つたんだ…  
もう…何もかも、奪い取られた

何もかも、意味がなくなつたんだ……。『

『……あきらめるなー』

汐は、翼の震える右手を取り、しゃがんだ。

「あきらめなこで下わこ。

あきらめるのは、まだまだ早いですよ。

迷子になつたら、自分で正しい道を見つけるんです。  
夢や希望を、田んぼ探し出すんです。

自分では何も出来ない時は、願つんですね。』

取つた右手を、両手で包み込むように握つた。

「どうか……この手がもう一度、絵が描けますように……

道が、見つかりますよつこ……

夢や希望が、もう一度見つかりますよつこ……

少女の絵が、少年に話しかけた。

『お連れしましょうか?この町の、願いが叶つ場所へ…』



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0829k/>

---

CLANNAD ~ Ushio's story

2010年10月10日18時16分発行